



アクティブ運用の魅力語る

対談：川元 由喜子氏 × 岡本 和久
レポーター：佐藤 安彦

川元 由喜子(かわもとゆきこ)さん

東京大学経済学部卒。日興証券株式会社、日興証券投資信託委託会社、日興インターナショナル・ニューヨーク店、HSBC 投信投資顧問株式会社、ありがとう投信株式会社などでアナリスト、ファンド・マネジャー業務に従事。現在、「経済に強いママを増やす会(経ママ)」を主宰。

ブログ：<http://quelle.blog.so-net.ne.jp/>

〈なぜ、アクティブ運用なのか〉

岡本：最近、アクティブ投資のセミナーを開催したようですね。好評だったとききましたが、そのセミナーの内容や様子について聞かせてください。

川元：株式投資に興味はある、あるいは少し始めたけれど今一つよく解らないといった感じの方を対象にしたセミナーでした。アクティブ投資ということなので、インデックス投資のセミナーとはちょっと違う内容になったと思います。正確にいうと私がお話するアクティブ投資というのは個別銘柄投資という意味です。

株式投資セミナーというと、従来型のどの株が上がりますという話か、インデックス・ファンドを買きましょうという話がほとんどで、その間にあるアクティブ投資の話をするセミナーがもっとあっていいんじゃないかと思ったのです。

内容は、資産形成のためにアクティブ投資をしようというもので、つまりお金を貯めていくためのアクティブ運用の話だったんですね。現状では、お金を貯めるというとインデックス運用をしようという話が多いし、アクティブ運用となるとバタバタと売り買いをするものという





長期投資仲間通信「インベストライフ」

メージを強く持たれてしまうんですが、私は自分ではお金を貯めるためのアクティブ運用をずっとやってきたので、その話をしようと思ったのです。

岡本: 長期のアクティブ運用ですね。

川元: 私の場合は、アクティブ投資がコアで、それだと分散が足りないので、いわばサテライトとしてインデックス投資をしています。なので、岡本さんとは反対ですね。

岡本: 市場というのは、色んな人が色々な考えでやっているところに価値があるのです。私は別にアクティブがダメだとは思っていません。川元さんもお存じのように私も若いころは証券会社でアクティブ投資の銘柄選びや投資戦略の策定をしていましたからね。ただ、投資の経験の全くない人、しかも、それほど投資に興味のない人が退職後のために何かしなければというのであればインデックス運用を使うのが便利だと思っています。川元さんのアクティブ投資をコアにするというのは面白い考えだと思います。色々な多様性があっていいのです。

川元: そうなんですよね。それなのに日本の場合は、価値観の多様化がどこかで躓いている。

岡本: それはよくわかります。でもインデックス運用というのは、日本の仕組みに良くマッチしたんですよね。

川元: そうですね。セミナーでも言ったのですが、ちょうど私が運用会社に入った頃にインデックス運用が拡大して行って、新しい事が始まる感じだったのですが、話を聞いてみたら日本のサラリーマン社会に合っている気がしました。目立った成績をあげるのではなくて、間違えないようにとか誰かに責任が及ばないようにとか、そんな風を感じた事を覚えています。

<どんな経歴なのですか？>

岡本: なるほど。ちょうど小学校の運動会で全員が一等賞のような・・・(笑)。ちょっとここで、川元さんの経歴や資産運用との関わりについて、紹介してもらえますか。

川元: はい。元々は日興証券に入ったのですが、入ってすぐに関連会社の投信会社に配属になりました。当時は日興証券投資信託委託という会社でした。それまでは、子会社には中堅社員が行くイメージがあったんですが、その年に、日興証券投資信託委託でも初めて新卒を採ったということで、そのグループに入って調査部の一員として、日本株の個別銘柄の調査をする仕事を1年間やっていました。それから日興証券本体の投資戦略を策定する情報部というところに転勤になりました。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本:ちょうどその時に私が9年間のニューヨーク駐在勤務を終えて帰国した。それが川元さんとの出会いでしたね。その後、ニューヨークに行ったのですね。

川元:行ったのは87年のブラックマンデーの直後でした。家で転勤のための引っ越し荷物の整理をしながら、暴落を伝えるラジオのニュースを聞いていました。アメリカにはそこから4年ちょっと居ましたね。

岡本:アメリカでは何をやっていましたか。

川元:最初は、日本株の営業部で仕事をしました。日本株のファンドをやっているアメリカの投信会社年金などに日本株を売り込みに行く仕事ですね。その後は、現地の株を売買する仕事をしました。アメリカ株以外にメキシコも担当していた事もあって、何度かメキシコに出張しましたね。当時日本がバブルだったので、お金を持っているだろうという事だったので、メキシコの財務大臣に会いに行ったことなんかもありましたよ。

岡本:なるほど。たしかに中南米の国だと、当時はよく大臣なんかも出てきましたね。それで、92年の途中で日本に戻ってきた。そして？

川元:エクイティトレーディング室で金融法人営業の仕事をしていました。外国株式のチームです。そこには94年までいて、95年からはHSBCグループに転職しました。HSBCには9年弱在籍していて、日本株のファンド・マネジャーとして投信や年金のアクティブファンドを運用していました。

岡本:HSBCを辞めたのが2003年。辞めてからは何をしていたのですか。

川元:しばらくは子育てをしながらアルバイトをしていました。その頃は新規上場ブームで、上場に必要書類を作成する仕事もしていました。最初は、優良な会社が多かったんですね。その後、段々とREITを組成している不動産会社などが増えてきて、最後の頃は、引き受けるのはちょっと・・・みたいな会社が増えてきたんですね。そういう会社は案の定倒産したものもありましたね。それで、2008年のリーマンショックのすぐ後に、ありがとう投信に入りました。

岡本:ありがとう投信でもアクティブ投資をやっていたんですか。

川元:そうです。ありがとう投信はアクティブ・ファンドの会社ですが、運用と言ってもファンド・オブ・ファンズなので、マーケティングに近い仕事もしていました。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

<パッシブ運用、インデックス運用、プロセス運用>

岡本:気持ちとしてはずっと、アクティブ投資の信奉者としてやっていたんですね。

川元:はい。そうですね。法人向けに外国株の営業をやっていた頃は、システム運用もやっていました。やっていたと言っても、システム運用をやっている部門に営業としてついていって、話をするだけだったんですけれどね。でも、根が文系なので、システムのなものには最後まで興味が持てなかったですね。

岡本:システム運用とインデックス運用はかなり違うものと思いますが、川元さんはどう感じていますか。

川元:そうですね。機械によるアクティブ運用がシステム運用という定義なんでしょうね。でも今は、その辺の定義があいまいになっている気がしていますね。昔はパッシブ＝インデックスでしたけど、今はインデックスだからパッシブということはないですよ。アクティブなインデックスもありますからね。

岡本:アクティブ運用というのが、市場の一部分の良さそうな銘柄を選んで買うという定義付けであれば、アクティブなインデックスはいくらでもありますね。日経平均だってアクティブなインデックスです。

川元:今の定義は、人間が判断して売買をするのがアクティブ運用ってことだと思いますが、今度はロボットアドバイザーが出てくると、ロボットが判断してもアクティブ運用ってことになってきますね。

岡本:なるほど。でもロボットに判断を教え込んでいるのは人間なんですけど、まあ、パッシブとはかけ離れはじめているのは確かですね。正確には人間が一定のプロセスを構築してそのプロセスが出す指示に100%従って運用するというのが「プロセス運用」です。その意味ではインデックス運用もプロセス運用の一種です。一方、パッシブ運用は市場全体のパフォーマンスを受け入れる運用ですから、すべてのインデックス運用がパッシブとは言えない。日本株のインデックス・ファンドだけを買っているのは、実はアクティブな運用なんですよ。だって、日本にだけ賭けている訳ですから。もっと言うと、全世界の株式インデックス・ファンドを持ったとしても、それも完全なパッシブではなくて、他にも債券や現物、不動産、エネルギーや農産物の様な先物もあったりして、更には絵画など、ありとあらゆる投資対象を入れなるとなると考えてしまいますね。厳密に言えばありとあらゆる投資対象を時価総額加重で算出した指数に連動するファンドこそがパッシブなファンドです。これがいわゆるマーケット・ポ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

ートフォリオでしょう。、その一部をたくさん持ったり、持たなかったりするファンドはすべてアクティブということも出来るのではないかと思います。

川元:そこまでいくと大変な事になってしまいますね。だから株だけに絞ってやっているんですけどね。

<何といっても配当が大切>

岡本:現実的な対応としてマーケット・ポートフォリオは世界の株式インデックス・ファンドでしょうね。ところで、川元さんがアクティブ運用に惹かれる魅力ってなんですか。



川元:それは、一つ一つの会社の顔が見えるという事だと思います。やっぱり投資とは何かという問題を突き詰めた時に、それが基本なんだと思います。会社の事業に投資するのであって、インデックスだと何に投資しているか分からないですよ。投資しているという実感を持ってません。数学的な頭の人はいくらでもよいのかも知れないけれど、私はやっぱり事業を見ることができなくて、何をやっている会社なのか分からないと投資した気になれないんですよ。

岡本:確かにそれが投資の基本だと思います。

川元:さらに当たり前の話として、配当を貰うために投資するってことですね。そもそも事業に出資するってことは、配当を貰うためにやっている訳ですよ。

岡本:うん。投資収益はせじ詰めればそれしか無いですね。

川元:そうなんです。それなのに、それが当たり前だという事をみんな忘れてしまってるんですよ。だから日本の市場ってすごく歪んでいると思います。投資家の多様化が進んでいないってこともそうですし、配当を每期每期、ちゃんと出している会社が全然評価されていないんですよ。歪んでいるからそこに投資すればチャンスだと思うので、今は、配当利回りの高い銘柄を買うべきだと盛んに言っています。

岡本:それはなんでもかんでもインデックスというのも異常な状態ではあるけれど、逆にアクティブの中にも異常な状態が起きているってことですね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

川元: そうなんです。要するに成長に対するオブセッション(脅迫観念)なんですよ。高度成長期はそれで儲かったから、成長しなくてはならないというオブセッションが物凄く強いんだと思います。

この間のセミナーでは、もしある会社の利益が、全く成長していなくて每期每期同じでも、配当を出さなければその分純資産が積み上がって行って、その会社の価値は成長しているんですけど話をしたんです。

岡本: そうですね。企業の価値としての株主資本は増えていきますからね。

川元: そうですよ。だから、目立った成長はしていなくても良いんですよ。国が成長していないのに、成長株を見つけるのは大変に決まっているんですよ。ですから、成長しなくてはならないという考えを忘れた方が良いと思うんですよ。每期ごとにきちんと配当を払えることをもっと評価しなくてはならないと思います。

岡本: それはよくわかりますよ。その視点で企業を見ると内部留保されている資産がどのようにビジネスで使われているかが大事なんですよね。もしそれが銀行預金になっているんだとしたら、それは配当金に回してほしいですよ。投資家が受け取った配当金を自分で預金すればいい。そうでないのであれば、少なくとも現在のROEよりも高い分野への投資を続けていくことで利益の増え方を加速させてほしい。そのために内部留保するなら分かりますけどね。多くの会社がそうではなくて、ゼロ金利の預金などに置いているだけではROEが低下してしまいますからね。企業のアニマル・スピリットがそこに現れるのではないのでしょうか。

川元: やっぱり古い会社の多くは大企業病ですね。資本の論理を忘れてしまっている会社が多いと思います。

< 銘柄選択の基準は? >

岡本: 話は変わりますが、川元さんが銘柄を選ぶ時の基準があると思いますが、それを教えてくださいませんか。

川元: まずは、配当利回りで銘柄を探しますね。利回りが高い銘柄が見つかったら記念配当や資本構成の変更など特殊要因が無いかをチェックして、それから、業績動向、配当性向や財務情報を確認していきますね。それで買ったとしたら、そこからは配当の事だけを気にしていればいい。だって基本的に売らないんですから、株価は気にしない。そうすると随分、楽になると思いますよ。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本:確かにそれは良いかもしれない。配当金を貰えることにありがたみを感じるのは良いですね。

川元:配当金をもらえてその上、株主として企業に保有する資産が増えていくんですから。だから後は、配当が減ることだけを心配してほしいですね。

岡本:今の話だと、配当利回りを見て、そこから個別銘柄に入って分析していくということでしたけど、例えば業種などはどう考えていますか。成長業種の中から良い銘柄を見つける、いわゆるトップダウン方式でやる考え方ですけど。

川元:それは私はあまりやりません。やっぱり配当から個別銘柄を見つけるボトムアップ方式でやっています。資産を増やすには、割安株を買うのが良いんですが、割安の基準を何にするかという時には、純資産よりも配当で見た方が良いんじゃないかなと思います。それで、配当の高いものをピックアップしています。対象の銘柄を並べた時に業種が偏っていたら、分散のためにインデックス・ファンドを買う、というふうに考えますね。

岡本:なるほど。なにか面白い例などありますか。具体的な銘柄を上げるのは難しいかも知れませんが、どうでしょうか。

川元:先日のセミナーでは具体的な銘柄でないとピンと来ないと思ったのでキヤノンを例にしました。もちろん、推奨するのではなく理解を容易にするための例です。どうしてキヤノンを選んだかという、まずみんなが知っていて、大体どんな会社か分かる。そして配当利回りで探すと必ず引っ掛かってくる。配当利回りに関しては長年ランクインしますね。まさしくこれが配当を出しているのに評価が低い会社の例なんですけどね。

岡本:利回りは何パーセントくらいなんですか。

川元:4.6パーセントぐらいです。それだとフルに税金を支払っても3.7パーセント残ります。

岡本:NISA口座で持っていたら良いですね。

川元:そうですね。私も一部はNISAで持っていますよ。

それで、キヤノンの配当利回りが3パーセントを越えてから、随分と経っているんですね。競争が厳しくなったり、デジタルカメラが売れなくなったりして、業績は落ちてきています。キヤノンは昔から現金を持ち過ぎだと散々言われてきたので、ある時から配当を積極的に出すようにしたみたいですね。だけど業績が良くならないから株価は上がらない、それで配当利回り



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

が上がり続けている。株価が配当には反応しないで、業績にだけ反応するんですよ。色んな評価があるでしょうが、ここまで極端なのは、いかに市場が歪んでいるかという事ですよね。

岡本:業績が悪くなるほど、配当で払えって声も出るでしょうからね。

川元:はい。そういうことは大いにありますね。

それからセミナーでは、投資した会社の将来について、いくつかのシナリオを考えてみましょう、というお話をしました。業績を予想するといっても、それはとても難しいことですし、最終的にどうなるかなんてわかりません。「どうなる」と予想する必要はなくて、それぞれのシナリオがどれくらいの確率で起きるだろう、と考えるみればいいんです。

岡本:それに対して、参加していた方はどのような反応でしたか。もしかしたらびっくりされたかも知れませんね。

川元:みなさん、こんな話は聞いたことないという反応でした。あとは、「配当で銘柄を選ぶという考え方は、大変説得力がありました」という感想もありました。

岡本:結局、配当金というのは、株主と企業を結び付ける唯一の絆なんです。未来永劫、何かの理由で絶対に配当金を払わず、倒産も解散もしない会社の株価はつきませんませんからね。

川元:配当金ほど、明快で確実な価値基準は無いんですよ。純資産の何倍だとか言われても、純資産がどれだけあっても、それだけで何かの実現するとは限らないんですからね。

岡本:純資産は結局、それをどう活用してそれが配当金の原資になる利益をもたらしてくれるのかに意味があるのであって、純資産だけが単に大きくてもダメなんだと思います。

川元:個人が投資するという意味では、配当を見るのが明快で一番優れていると思います。配当を出しているということは利益が出ているということであり、配当が減らないと思えるのは、事業がうまくいっているのだろうということですから、良い投資ができる可能性が高まりますよね。

また、今は個人投資家でも、ちょっとした機関投資家と遜色無い情報が手に入る世の中になっているので、情報を公開している会社の経営がどうなっているのかを色々と調べることができますね。経営が良いとか悪いとか、なかなか判断するのは難しいけれど、アクティブ投資って、やって一番楽しいのは、その辺のことなんですよ。調べている時が楽しいってことも大切じゃないかという話もしました。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本: プロのアナリストは色々な情報を得ているんだけど、今はそれと大体同じような情報がインターネットから取れてしまうから、実は新しい情報ってのはあまり無いんですよね。だから、機関投資家は得た情報をどう解釈するかがポイントになってきますね。

川元: 昔は個人投資家が持っていない情報を持っていたところに機関投資家のアドバンテージがあったんですけどね。今はそれがあまり無くなってきていますね。個人投資家と機関投資家の格差がある意味、すごく小さくなってきている、さらに個人投資家は運用報告をしなくてよいのだから、それはものすごいアドバンテージなんです。わざわざお金を払って機関投資家に資金を預けなくても、興味がある人は自分でどんどん調べて投資したらよいと思います。あとは、株主総会に行ってみるのもいいですよ。私は株主総会に出てみたいと思って買った株はいくつかあります。去年はソフトバンクの株主総会に行ってみたくらいからそのうち株を買おう、なんて思っていたんですが、年末に孫さんがトランプさんに会ったりして株価が急騰してしまったので買いそびれてしまいました(笑)。実はなんとなく昔から孫さんのことがあまり好きでは無かったんですが、面白そうな社外取締役もいらっしゃるし、話を聞いてみたい、なんて思いますよね。

岡本: なるほど。でも、孫さんもトランプさんもやっぱり事業に対しては真面目だと思いますよ。1円でも1ドルでも資金を稼ぐことがいかに大変で、それをどう上手く使っていくかということには細心の注意を払っていると思いますよ。だからそういう発想で国の経営をやってくれるのであれば、トランプさんは大きな影響力を持つだろうと思いますね。企業は、自分達で汗を流して資金を稼いでそれを効率良く活用していく意識がありますよね。政府の場合、稼ぐのではなくお金を税金として取っているんだから、使い方について企業とは意識の違いが出てしまいますよね。

アメリカ株式会社社長としてのトランプさんの目から見ると、株主はアメリカ国民であって、彼らに対して最大限報いるためには何をしたらよいのかという意識がいつも頭の片隅にあるんだと思いますよ。それは国防であったり社会保障であったり、色々なことについて言えると思います。そして最大の問題が雇用だと考えているんだと思います。そうして考えると、例えばアメリカの企業がメキシコに工場を作って無税でアメリカに持ってくるなんていうのは、アメリカ株式会社の社長からすると放っておけない事なんじゃないかな。こういう発想って、いまの政治家にはかなり必要なんだと思います。それはアメリカだけではなくどこかの国の首相のように色々な所に行って「はい、1兆円。はい、1兆円」なんてことは、株主である国民のことを考えたら、きちんと説明が必要ですよ。

川元: そうですね。それを許してしまう国民も納税しているという意識が低いのかも知れませんね。

<株主優待にも注目>



長期投資仲間通信「インベストラيف」

岡本:さて、少し話を戻しますが、配当金以外に生活に密着したような銘柄選択のポイントはありますか。

川元:それはやっぱり株主優待でしょうね。株主優待には賛否両論あって、確かにやり過ぎていたり、ちょっとどうかなと感じるものもありますが、基本的には合理的な行動だと思っています。なぜならば、企業にとって個人投資家に株を持ってもらうことは、資本構成の面でより安定するからです。機関投資家は大量に持っているから、何かのきっかけで一気に売ることがあり得ますよね。特に日本は、機関投資家の考えることが皆似ていますし。これは、企業から見たら極めて不安定です。逆に個人投資家は、多くの人が色々な価値観で保有しているので、一方向に一気に動かないんですよ。だから、会社が個人投資家にたくさん保有して貰いたいと考えるのは合理的だと思います。

岡本:なるほど。経営面の手段として株主優待を使うという訳ですね。それであれば非常に有意義だと思いますね。

川元:特に新製品をサンプルとして株主優待に出すとかは、とても意味があると思います。例えばレストランであれば割引券で店に来てもらうなど、企業にとってもすごくメリットがあると思いますよ。その企業の工場がある土地の特産物をくれる優待なんているの也有ります。私はとても気に入っているのですが。

岡本:ふるさと納税の企業版みたいですね。

川元:そうなんです。私が保有している静岡の某自動車部品メーカーですが、夏は新茶で冬はミカンを貰えます。なんか嬉しいんですよ。株価はちょっと割高なんですけど、売らずに持っていますよ。

岡本:ふるさと納税は税金だから払ったお金は戻ってこないけれど、株はもしかしたら大きくなって戻ってくるかも知れないですね(笑)。

川元:会社にとっても、地元への恩返しになりますからね。とても良いことですよ。

岡本:そうですね。どこかの企業に投資する時、原点として自分の生活に密着していて、例えばそれが食品メーカーであったり、コンビニエンスストア・チェーンであったり、宅配をしている物流の会社だったりしても、消費者として自分が好きだという視点で選んでみるのも楽しいですよ。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

川元: 企業やサービスが良いかどうかは、大事なポイントですよ。まあ、どんなに良くても私の場合は配当がゼロだったら多分買いませんけど(笑)。

逆に、配当利回りが4パーセントあるけれど好きでも嫌いでもない会社を買うよりは、例えば2.8パーセントでも好きな会社を買うということはあると思います。そして、実際にその方が良いんだと思います。

岡本: そうですね。その会社に頑張ってもらいたいと思う気持ちが出ますからね。

川元: 商品やサービスが良いと思っているなら、いまは2.8パーセントでももっと伸びると思えますよね。反対に今が4パーセントあっても何やっているか分からない会社だったら、いつ利回りが下がるんだろうって不安になりますよね。

岡本: 以前も皆さんに話したことがあるんですが、小学校2年生の女の子が、夏休みの自由研究で株のことを書いたんです。それが本当によく書いていて、株式の収益率の計算なんかも手計算でやっていたりして、見ていてちょっと感動する内容なんです。その子がお年玉の10,000円でスターバックスの株を買ったら50,000円になったと言っていました。それで、その女の子は時々、友達と学校帰りにスターバックスで勉強をしていたことがあるみたいなんです。ある時に店に行ったら「ここで長時間の勉強は止めてください」って書かれた貼り紙があったんですって。

彼女はそれを見て、ここで勉強していた人間としては困ることだけれど、株主としては意味があって良いことだと理解したわけですよ。でも、この事で店の人気落ちるのは困るのも思っただけです。それから、その店の店長にもっと子供向けのメニューを増やしてほしいという提案書を作って持っていたら、本当に子供向けの商品が増えたらいいですよ。

これはもう立派なアクティビズムですよ。でも、サービスや商品が好きな場合って、こういう事ってあるんだろうなって思いますよ。

以前に、株主として手紙を書こうなんてキャンペーンをやったことがありますが、やってみると意外と返事が返ってくるんですよ。真面目にも社長直筆で返事があったり、社員全員の前で読んで聞かせましたって返事だったり、そんな事でもやって反応を見てみると、それぞれの会社の体質が分かることもあるんですよ。

川元: 色々と会社との交流を試みるのも面白そうですね。

岡本: 「私はこういう理由であなたの会社を応援している小さな株主です。このたびは配当金をありがとうございました。よい社会をつくるためにもこれからも私たちのために頑張ってください」と手紙に書いてみることで、自分がなぜ投資をしているのか改めて再確認することにもなりますからね。

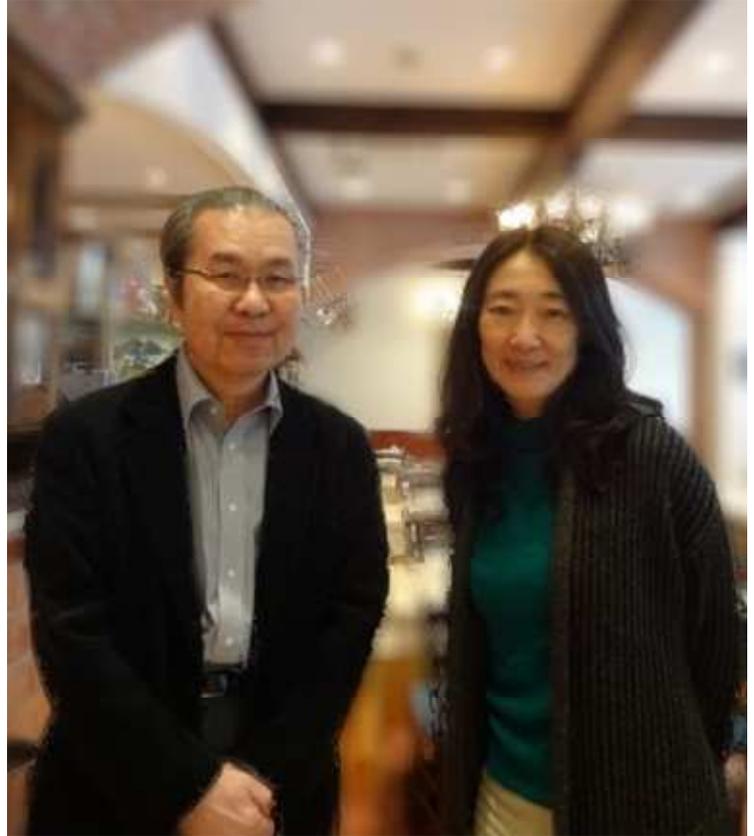


長期投資仲間通信「インベストライフ」

川元:確かにすごく良いと思います。

岡本:企業もね、アクティビズムとして色々と脅されるよりも、おだてられた方が良く働くんですよ。これは人使いの基本原則(笑)です。

川元:手紙の他には、例えば株主総会もそういう場になり得ると思います。私が好きな株主総会にバンダイナムコがあるんですが、総会の雰囲気は他の企業とはすごく違うんです。出席している人が会社の商品とかサービスをよく知っていて、積極的に議論に参加しているんです。オタクの世界だから、私は解らないことが多いんだけど、ファンの集いみたいで雰囲気が面白いですね。



岡本:もっと個人投資家が影響力を強めるようになったら、総会も色々変わってくるでしょうね。

川元:バンダイナムコの株主総会で一番良いと思うのが、選ばれるべき取締役候補が一人ずつ一言スピーチをする事なんですね。そうでなければ選挙演説を聞かずに投票するようなものです。他の会社もやれば良いのと思うんだけど、他にやっている会社は、今のところ見たことがないですね。

岡本:結局、出来レースになっていますからね。

川元:実際にはそうでも、大勢の株主がいる前で「私が取締役になったら、〇〇を実現します」とか宣言したらやる気になりますよね。だって、翌年の株主総会で「去年こんな事言ったけどどうなった？」って質問が来ますからね。毎年出席する個人投資家はいますから。だから企業には、株主総会を良くしようっていう努力をして欲しいですね。

岡本:これからどんどん企業が良くなっていくことに期待したいですね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

どちらかというと個人投資家はインデックス・ファンドでいいという風潮もあります。それはそれで意味があるのですが、少し基礎ができて来たらやはり個別銘柄への投資というものも体験してもらいたいと思いますね。本日はありがとうございました。